元曉『法華宗要』訳注（1）

金　　炳　坤
（仏教学専攻博士後期課程２年）

1．序論　－ 海東法華経疏の源流 －

朝鮮半島（以下、海東）において、『法華経』を所依経典とする天台宗が、国家公認の宗派として正式に認められたのは、11世紀末になってからのことである。すなわち、高麗時代に、義天（CE.1055-1101）によって開かれた、海東天台宗がそのはじまりである。

海東天台宗の成立は、海東におけるそれまでの法華・天台教学に対する抜本的な見直しと同時に、天台教学に基づいたそこからの本格的な『法華経』研鑽を意味する。

おそらく義天は、隆盛を極めていた当時の仏教界へ、新たな勢力としての参入を第一に、宗派という拠点を設けることによって、それを支持基盤とし、これらの所願を成就せしめようと意図したのであろう。そうしたなかで彼は、海東における法華・天台教学の源流を、元曉（CE.617-686）と、諦觀[1]（CE.-961-）との二師[2]に求めている。要するに彼は、海東における法華・天台教学の始祖を、特定の宗派に属さぬことで高名な元曉に担わせることによって、そこに、海東天台宗の正当性を持たせようとしたのである。

実際に、８世紀中頃までの記録である『大日本古文書―正倉院編年文書』から、19世紀末までの記録である『蓮門類聚経籍録』まで、海東と日本の23の目録類に見られる海東諸師章疏を調査・整理した福士慈稔博士の研究成果[3]をもとに、義天以前に活躍した諸師のなかから、法華章疏を著した諸師の人名と、その書名とを総括してみると[4]、

⑴元曉　①『**法花［経］宗要**』１巻（『大日本古文書―正倉院編年文書』・以下、『古文書』）、②『法花［経］要略［記］[5]』１巻（『古文書』）、③『法花略述』１巻（『古文書』）、④『法花疏』５／３巻（『古文書』）、⑤『［法華経］方便品料簡』１巻（『新編諸宗教蔵総録』・以下、『義天録』）、⑥『［法華経］綱要集』１巻（『東域伝灯目録』）、⑦『法花略記』２／３巻（『古聖教目録』）

⑵義寂　⑧『法花［経］料簡』１巻（『古文書』）、⑨⑵・⑶義一『**法花［経］論述記**』１／２／３巻（『古文書』）、⑩『**法花経験記**』２／３巻（『山王院蔵書目録―顕教書目録』）、⑪『［法華経］綱目』１巻（『義天録』）、⑫『法華経科苟』１巻（『大小乗経律論疏記目録』）

(4)玄一　⑬『法花経疏』10／8巻（『古文書』）

(5)憬興　⑭『法花経疏』10／16（8）巻（『古文書』）

(6)順憬　⑮『[法華経]料簡』1巻（『義天録』）、⑯『法花音義』2巻（『古聖教目録』）

(7)道[遁]倫　⑰『[法華経]疏』3巻（『義天録』）

(8)太[大]賢　⑱『[法華経]古述記』4巻（『義天録』・高山寺蔵本）

以上の八師18部の法華章疏が確認でき、目録類から見ても、元曉は、注疏製作による仏典研鑽の時代を迎えた7世紀以降の海東において、最初に『法華経』の注釈書を手がけた人物として知られているのである。特筆すべきは、上記のうち、現存するものは、わずかに3部（**ゴチック体**）に過ぎず、いずれも海東にはその伝本がなく、日本においてのみそれぞれ1部ずつの伝本が知られていることである[6]。つまり、本稿のテーマである元曉の『法華宗要』（以下、『宗要』）は、海東における現存する最古の「法華経疏」になる訳である[7]。

2．資料の検討　— 書誌学的考察 —

『宗要』は、海東における現存する最古の「法華経疏」と称されるだけあって、多種多様なる研究の蓄積がある。従来の研究を大別してみると、主に、和諍・一乗といった基軸用語を中核とする思想研究[8]や、教判論[9]を中心とした吉藏（CE.549-623）との関係・天台教学[10]の影響の有無を論点とする歴史研究などが知られている。

かくて、今一度『宗要』の訳注研究を推し進めるのは、以下の理に由る。

『宗要』のテキスト[11]は、③1926年に発行された『大正新脩大藏經』（以下、『大正蔵』）第34巻所収（870c-875c頁）のものがスタンダードとして利用され、筆者の現在まで確認できたその後のテキスト【④1949年東國大學佛教史學研究室編『元曉大師全集』第1册所収本、⑤1978年趙明基編『元曉大師全集』所収（3-18頁）本、⑥1979年東國大學校佛典刊行委員會編『韓國佛教全書』（以下、『韓佛全』）第1册所収（487c-494c頁）本】すべてがこれをほぼそのままの形で踏襲している。③『大正蔵』所収本は、そこに記された唯一の校勘記によっても知られているように、①「仁和寺蔵本[12]」がその底本になっており、このほかに対校本はない。つまりは、①「仁和寺蔵本」が現存する唯一の伝本として知られる訳である（以下本稿では、これを「原本」と呼ぶことにする）。

ところで、この③『大正蔵』所収本には、「原本」を翻刻するに際して、判読できずに四角（□）で記した43箇所の欠字がある。周知の如く、②徐居正（CE.1420-1488）等受命（朝鮮成宗9年・CE.1478）編『東文選』巻の83には、『宗要』の「六門分別」（次項の図式参照）のうち、「初述大意」に相当する「法華經宗要序」が収録（1-2頁）されているため、『大正蔵』以降のテキストでは、③『大正蔵』所収本の欠字という不備を補正すべく、⑤

『元曉大師全集』所依本は明記せぬまま②『東文選』所収の「法華經宗要序」を用い、恣意的な反映を行っているし、また、⑥『韓佛全』所収本も対校本として②『東文選』所収の「法華經宗要序」を用い、校勘記にその異同を示してはいるが、この「法華經宗要序」（＝「初述大意」）は、あくまでも全体のなかの一部分に過ぎないため、当然のことながら、文献全体に亘っている欠字をすべて補うことはできない。

文献研究は、「原本」に基づいた基礎的な研究が不可欠である。しかしながら、『宗要』の研究史上、「原本」を用いての書誌学的なアプローチは皆無であった。それゆえに、従来の研究（塩田義遜［1960］以降）では、欠字が含まれている『宗要』の本文を引用する場合、その欠字に対して、もっぱら研究者自らの推定による補足が行われてきたのである。

したがって、ここに新たな試みができるのである。すなわち、本訳注研究では、まず、天下の孤本として知られる①「仁和寺蔵本」をはじめ、②『東文選』所収の「法華經宗要序」、③『大正蔵』所収本、⑥『韓佛全』所収本を校閲し、また、『宗要』自体に出典が明らかにされている経典・論書からの引用はもちろん、典拠を明かさずとも引用・援用が認められる経典・論書をも調査、それらを原典より確認し、さらに、補助的な手段として、『宗要』を引用している後代の章疏[13]に記された文例とも対照することによって、『大正蔵』収録のための翻刻に際して、判読できずに四角（□）で記した、43箇所の欠字に対する文字の確定並びに誤字の訂正・脱字の補填を行った批判校訂版を製作すること。次に、この批判校訂版を訳注の原文として用い、未だ和訳のない『宗要』の訓読訳を提示することである。

というのは、『宗要』は、すでにハングルによる現代語訳[14]がいくつも存する訳であるが、これらは③『大正蔵』所収本の有する問題、すなわち、翻刻の際の誤りによって生じた不備からの脱却ができておらず、それをそのまま引きずった誤訳がなされているために、たとえ、これらが修辞学的な評価は得ているにしても、学術的に利用せんがためには少しく性質を異にすると言わざるを得ないからである。したがって、文献の持つ思想・内容を十分に理解するためにも、文義に適い意味に徹した、一字一句を正確に読み下した新たな訳が要請される訳である。

ゆえに、以下では、上述してきた、筆者の最も有効であると考えている研究手法（諸テキストの校閲、引用経論の調査・確認、関連資料との対照）を用いて、テキストの扱いに対するこれまでの問題点を是正し、海東法華教学史の根底に位置付けられ、初期の法華教学の様子を伝えている『宗要』の訳注研究を進めていくことにしたい。

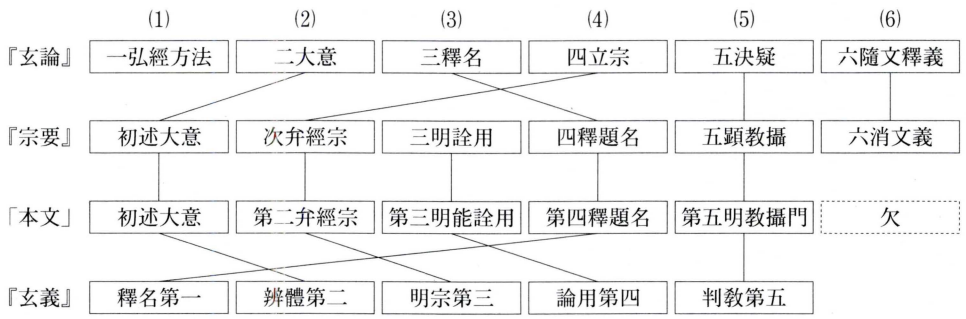
3．『宗要』の構成

『宗要』における吉藏の影響、とくに、彼のいわゆる「法華五部書」のうち、『法華玄論』

（以下、『玄論』）と『法華遊意』（以下、『遊意』）との２部からの影響が見られることについては、すでに先学による指摘があり、その該当箇所については、本稿の訳注の注記においても明記したとおりである。

『玄論』の場合は、『宗要』に採用されている科文の分け方、すなわち、(1)「初述大意」、(2)「第二弁經宗」、(3)「第三明能詮用」、(4)「第四釋題名」、(5)「第五明教攝門」、((6)「六消文義」は「原本」の冒頭に小字双行で題名が記されているのみで、本文は存在しない）という「六門分別」が『玄論』の科文を踏襲したものであるとされ、それがために、一部の研究者によって、『宗要』を『玄論』のエピゴーネンとまで言わしめた、言わば、問題の発端になったものである。

以下、先行研究において示された『玄論』と『宗要』との科文の対応関係、さらには、これに加えて『妙法蓮華經玄義』（以下、『玄義』）と『宗要』との科文の対応関係を図式でもって総合してみると[15]、



一見して明らかなように、『宗要』の「第三明能詮用[16]」を除いたほかの五門が、『玄論』の科文と外的な対応関係を示しているのである。

また、『遊意』の場合は、内的な影響を受けていることが指摘され、次項においても見ていくように、『宗要』の「初述大意」には、明らかに『遊意』の開題序からの援用と看做される同趣の文脈が多数見られており、しかも、『宗要』の「第五明教攝門」には、有説として引用されている文例が、『遊意』の説と完全に一致しているのである。

となると、先学の指摘のとおり、吉藏の上２部からの影響は、もはや疑うべからざる事実であろう。

だが、明確にすべきは、ここで言う影響とは、あくまでも広義の外延的な意味合いをもつそれであり、時代が容認して当時一般に流行していた章疏製作の傾向を、または、単にその一スタイルであったところを軽視して、影響という範疇に収めようとした嫌いがある。

厳密に影響と言う場合には、アレンジの仕方によって導き出そうとした、そこに内包されている思想・内容との関連性が論じられてはじめて影響の度合いが言えるだろうし、そこに

こそ影響論の争点があらねばならない。

もっとも、問題を提起し解決するにあたって、全体の内容を知っていて包容力をもって肯定するか、知らずに断片的な知識でもって頷くかは大きな違いがあるからである。

さて、『宗要』の「六消文義」であるが、先述したように、「原本」には題名が記されているのみで、その本文は存在しない。この問題に対して、福士慈稔博士は、「この箇所は現存しておらず、又、元曉が実際に著したものかどうか不明である。[17]」と最も妥当で、かつ慎重な見解を呈されているが、文献全体を通してみると、「第三明能詮用」の最後に、「廣而論之。爲破十種凡聖執故。說七種譬及三平等。此義至彼第六門釋。第三明詮用竟也。[18]」とあるように、製作意図が窺われる節がない訳ではない。ともあれ、存在しない以上は、これ以上のことは判らない。

しかしながら詮索して見ようとすれば、元曉の現存する22部の著述のうち、科文の題名に「消文(義)」を有するものは、『大慧度經宗要』1巻、『法華宗要』1巻、『金剛三昧經論』3巻、『起信論疏』2巻、『大乘起信論別記』2巻と、以上の5部からとなり、このうち、2巻本以上のものに関しては、「消文(義)」に本文の存することが確認できる。

そこで、元曉における「宗要」の位置付けを考えてみると、「宗要」とは、経の特質をコンパクトにまとめた、言わば、概論ともいうべきものであって、タイトルに「宗要」と付くほぼすべての元曉の著述が、1巻本として知られていることからも、決して随文解釈[19]、つまり、「消文義」を著するほどの大部なものではなかったことが察せられる訳である。

実際に、タイトルを「宗要」とし、『法華宗要』と同様の「六門分別」が採用されている『大慧度經宗要』の場合であっても、巻末には、「第六消文依論廣釋。大慧度經宗要終[20]」と締めくくられており、「消文」の本文は省略されているのである。

ゆえに、以上の事例から見て、筆者は『宗要』の「六消文義」は、絶筆と見た方が適切ではなかろうかと考える。

4．「初述大意」訳注

本稿では、「六門分別」のうち、「初述大意」までの、原文（批判校訂版）・訓読文・注記を示し、その続きは、次稿に譲る。以下は、原文・訓読文に関する凡例を示す。

〔凡例〕

1．〔原文〕は、「仁和寺蔵本」を使用し、対校本として、『東文選』所収の「法華經宗要序」を用いた。また、〔原文〕の見出しに付した頁数は、『東文選』・『大正蔵』・『韓佛全』の該当箇所を示す。

2．〔原文〕・〔訓読文〕の字体は、「原本」を充実に再現するために、略字・俗字・異体字

を含めて可能な限りそのままの形で表記した。例、「爾→尒」「本→夲」「無→无」

3．〔原文〕の句読点は、筆者の任意による。また、〔原文〕の下線は、経典・論書からの引用・類似箇所を示す。

4．〔訓読文〕の難読語に付したルビ、理解のために付した中黒点は、筆者の任意による。

5．〔原文〕・〔訓読文〕の注は、①などの番号によって示し、該当語の最初に付した。この番号の注は、科段の見出しに付したそれぞれの注のなかに〔注記〕として示した。

6．〔原文〕・〔訓読文〕に用いた符号は以下のとおりである。

『 』経典・論書名、「 」経典の品名、( ) 小字双行、{ } 写経者による添字、[ ] 筆者による補足、↘「原本」のおどり字（すべて補って記した）、□ 欠字の確定・誤字の訂正・脱字の補填箇所を示す。

0．六門分別[21]

〔原文〕(DMS.83 p.1r, *l.*3・T.34 p.870c, *ll.*7-11・HBZ.1 p.487c, *ll.*1-7)

①法華宗要　元曉師撰

將欲解釋此經。略開六門分別。(初述大意。次弁經宗。三明詮用。四釋題名。五顕教攝。六消文義。)

〔訓読文〕

『法華宗要』　元曉師撰す。

將に此の經を解釋せんと欲せば、略して六門を開いて分別せん。(初めに大意を述べ、次に經宗を弁じ、三に詮用を明かし、四に題名を釋し、五に教攝を顕わし、六は文義を消す。)

1－1．初述大意（文辞・義理）[22]

〔原文〕(DMS.83 p.1r, *ll.*4-8・T.34 p.870c, *ll.*11-16・HBZ.1 p.487c, *ll.*8-13)

初述大意者。①妙法蓮華經者。斯乃十方三世諸佛出世之大意。九道四生②滅入一道之弘門也。文巧義深。{无}妙不極。辞敷理泰。无法不宣。文辞巧敷。③花而含實。義理深泰。實而帶権。理深泰者。无二无別也。辞巧敷者。開権示實也。

〔訓読文〕

初めに大意を述ぶるとは、『妙法蓮華經』は、斯れ乃ち十方三世の諸佛の出世の大意にして、九道四生をして一道の弘門に滅入せしむるなり。文巧みにして義深く、妙として極まらざること{无}し。辞敷(あまね)くして理泰(おお)らかに、法として宣べざること无し。文辞、巧みに敷くして、

花にして實を含む。義理、深く泰らかにして、實にして権を帯(お)ぶ。理の深く泰らかなるは、二无く別无きなり。辞の巧みにして敷きなるは、権を開き實を示すなり。

1－2．開権・示実[23]

〔原文〕（DMS.83 p.1r, *l.*8 - p.1v, *l.*1・T.34 p.870c, *ll.*16-20・HBZ.1 p.487c, *ll.*13-18）

①開権者。開門外三車是権。中途寶城是化。樹下成道非始。林間滅度非終。示實者。示②四生並是吾子。二乘皆當作佛。③算數不足量其命。劫火不能燒其④土。是謂文辞之巧妙也。

〔訓読文〕

権を開くとは、門外の三車是れ権、中途の寶城是れ化にして、樹下の成道は始めに非ず、林間の滅度は終わりに非ずと開く。實を示すとは、⑤四生［衆生］並びに是れ吾が子なり、二乘は皆な當に作佛すべく、算數も其の命を量るに足らず、劫火も其の土を燒くこと能はずと示す。是れを文辞の巧妙と謂うなり。

1－3．無二・無別[24]

〔原文〕（DMS.83 p.1v, *ll.*1-4・T.34 p.870c, *ll.*20-23・HBZ.1 p.487c, *l.*18 - p.488a, *l.*1）

言无二者。①唯一大事。於佛知見。開示悟入。无上无異令知令證故。言无別者。②三種平等。諸乘諸身。皆同一揆。世間涅槃永離二際故。是謂義理之深妙也。

〔訓読文〕

无二と言うは、唯だ一大事、佛知見の「開・示・悟・入」に於いて、「无上」、「无異」、「令知」、「令證」の故に。无別と言うは、三種平等にして、諸乘・諸身、皆な同一の揆、世間と涅槃は永く二際を離れるが故に。是れを義理の深妙と謂うなり。

1－4．妙法・蓮華（1）[25]

〔原文〕（DMS.83 p.1v, *ll.*4-6・T.34 p.870c, *ll.*23-25・HBZ.1 p.488a, *ll.*1-3）

斯則文理①滅。妙无非玄。則離麁之軌。乃稱妙法。②権③華開敷。實菓泰彰。无染之美。假喩蓮花。

〔訓読文〕

斯れ則ち文［辞と義］理滅して、妙にして、玄に非ざること无し。則ち麁の軌を離れるを、乃ち妙法と稱す。権華、開敷し、實菓、泰彰(たいしょう)す。无染の美、假りに蓮花に喩う。

1－5．妙法・蓮華（2）[26]

〔原文〕（DMS.83 p.1v, *ll.*6-9・T.34 p.870c, *ll.*25-29・HBZ.1 p.488a, *ll.*3-7）

然妙法{妙}絶。何三何一。至①人至冥。誰短誰長。茲②處悅惚。入之不易。諸子瀾漫出之良難。③是如來引之④以権。羨⑤羊車⑥於鹿苑。示有⑦待之⑧麁身。⑨駕白牛於鷲岳。顕无限之長命。

〔訓読文〕

然るに妙法は、{妙}に絶すれば、何れか三、何れか一ならん。⑩至人は至冥にして、誰か短、誰か長ならん。茲の處、悅惚にして之れに入ること易からず、諸子、爛漫にして⑪之れ［＝火宅］を出づること良に難し。是れ如來、之れを引くに権を以てし、羊車を羨ましめて、鹿苑に於いて、有待の麁身を示し、白牛を駕して鷲岳に於いて、无限の長命を顕わす。

1－6．妙法・蓮華（3）[27]

〔原文〕（DMS.83 p.1v, *l.*10 - p.2r, *l.*5・T.34 p.870c, *l.*29 - p.871a, *l.*7・HBZ.1 p.488a, *ll.*8-16）

①斯②迺③借一以破三。三④除而一捨。假⑤修以⑥斥短。短息而⑦修⑧忘。⑨是法不可示。言辞相寂滅。⑩蕩然靡據。⑪蕭焉離寄。⑫不知何以言之。強⑬稱妙法蓮⑭花。⑮是以分坐令聞之者。⑯當受輪王釋梵之座。⑰逕耳一句之人並。得无上菩提之記。況{乎}受持演說之福。豈可思議所量乎哉。舉是大意以標題目。故言妙法蓮⑭花經也。

〔訓読文〕

斯れ迺ち⑬一を借りて以て三を破し、三除かるれば、一も捨せらる。修を假りて以て短を斥け、短息めば、修忘る。是の法は示す可からず、言辞の相寂滅せり。蕩然として據る靡く、蕭焉として寄るを離る。何を以て之れを言うかを知らず、強いて妙法蓮花と稱す。是を以て坐を分かちて之れを聞かしむる者は、當に輪王・釋・梵の座を受け、逕ちに一句を耳にするの人、並びに无上菩提の記を得べし。況や受持・演說の福をや。豈に、所量を思議す可けんや。是の大意を舉げて以て題目を標す。故に『妙法蓮花經』と言うなり。

5．小結

以上、「初述大意」の訳注を終える。かくして従来の研究では、欠字等を有する未完全なるテキストのこの不備の問題に対して、「原本」に立ち返る手間を経ずして、もっぱら研究

者の推定によって補われるのが常であった。もちろん欠字の問題ばかりではなく、これまでも様々な問題を論ずる上で、「原本」を用いる必要性が強調されてきた訳であるが、誰一人踏み切れずに、問題を問題のままに放置していたのが現状である。

このような状況の改善に努めるべくはじめられたのが本訳注研究であり、本訳注研究において、ようやく天下の孤本として知られる「仁和寺蔵本」を『大正新脩大藏經』以降はじめて用いる、『法華宗要』の研究史上初となる試みが行われたのである。

そのために、「原本」による確認が可能となり、これに並行して関連資料を網羅する研究手法を用いることによって、テキストの欠・誤・脱字を補完した批判校訂版の製作が完了し、その成果の一環として、本稿では、『法華宗要』の「六門分別」のうち、「初述大意」までの原文（批判校訂版）、訓読文（訓読訳ではあるが、初の和訳である）、注記を提示したのである。

なお、とりわけ、本稿においては、欠字10箇所の文字を確定し、誤字４箇所を訂正し、脱字１箇所の補填が行われた。

最後に、本訳注研究によって提示しうる付随的な成果としては、元曉の現存する22部の著述の著述年次並びに先後関係、また、『法華宗要』の著述年時（この問題に関して、詳しくは訳注（２）に明らかにする）などがあり、以上の未解決の問題に対する検討も視野に入れていることを付け加えておきたい。

注

（１）志磐撰（CE.1269）『佛祖統紀』巻第二十三に「建隆元年（庚申盡三年）吳越王錢俶。遣使往高麗日本。求遺逸教乘論疏。建隆二[CE.961]年。高麗國。遣沙門諦觀。持天台論疏至螺溪」（T.49 no.2035 p.249b, *ll*.8-12）とある。引用文中、[…] 括弧内は筆者による。

（２）金富軾（CE.1075-1151）撰『大覺國師文集』巻第三「新創國清寺啓講辭」に「緬惟海東佛法 七百餘載 雖諸宗競演 衆教互陳 而天台一枝 明夷干代 昔者 元曉菩薩 稱美於前 諦觀法師 傳揚於後 爭奈機緣未熟 光闡無由 教法流通 似將有待」（HBZ.4 p.530b, *ll*.8-13）とある。

（３）（福士慈稔［2009］pp.1-2, 註記（４）（５））参照。ちなみに、同研究手法を用いて新羅時代までの「法華経疏」について最初に言及した（江田俊雄［1936］pp.50-51）には、七師12部とある。

（４）以下、⑴〜⑻は筆者推定の生没年順、①〜⑱は通し番号、人名・書名中の［…］括弧は筆者による。また、巻数に続く（…）括弧内は初出の典拠を示す。

（５）「元曉には尙法華要略、法華略述と題して流傳せるものありしが如く、或は要略は本書［=『宗要』］と相似たものであつたのか、散佚の今日對照の術なきも、東域傳燈目錄卷上には、本書の下に細註して「與要略可對檢［=撿の誤植］之」［T.55 no.2183 p.1150a, *l*.5］としてゐる。（辻森要修）」（『佛解』10, p.73a）参照。引用文中、[…] 括弧内は筆者による。

（６）①仁和寺蔵本（請求記号：塔中蔵第49箱 第13号）内題：「法華宗要　元曉師撰」完本。
⑨京都大学附属図書館蔵本（請求記号：藏/7/ホ/25）題簽：「法華経論述記　巻上」欠本。
⑩東京大学総合図書館蔵本（請求記号：A00/4273）下巻の内題：「法華経集験記巻下　并序沙門寂撰」欠本。
なお、参考までに⑨・⑩に対する主要な研究成果を参考文献に付しておいた。

（7）元曉以前の海東における法華・天台教学の研鑽者（以下、①～⑦は生没年順）に、①新羅僧朗智（CE.-527-661-）、②百済僧發正（CE.-532-549-）、③百済僧玄光（CE.-573-）、④高句麗僧慧慈（CE.-595-622）、⑤高句麗僧波若（CE.562-613）、⑥百済僧慧顯［惠現］（CE.570-627）、⑦新羅僧緣光（CE.-601-604-）が知られているが、彼らが法華章疏を著したという記録は見当たらない。詳しくは、（鈴木覺心［1934］・金煐泰［1977・1983］・金昌奭［1978］・福士慈稔［1988］・李永子［1988a］・安重喆［1993］・桑谷祐顕［2007］）参照。

（8）（金昌奭［1979a］・石井公成［1983］・任禹植［1983］・李箕永［1983・1984］・鹽入良道［1984］・徐輔鉄［1985a・1985b］・徐榮愛［1995］・金英吉［1998］・橘川智昭［2003］・Muller, A. Charles［2009］）参照。

（9）（塩田義遜［1960］・富沢慶栄［1975］・金昌奭［1979b・1980］・平井俊栄［1987］・金勲［2001］）参照。

（10）（李永子［1988b］・福士慈稔［1990a・1990b・1991・2004］）参照。

（11）「現在，大正蔵経第34巻及び元曉大師全集第1冊に収録されている。東文選巻第83にその序文が載せられ，また順天仙巖寺には序文の板木1枚が現存する。」（『韓仏解』p.16）参照。以下、①～⑥は成立年順。

（12）54頁の冊子本。奥書に「弘安六年八月十七日［CE.1283.9.11］相承之了　華嚴宗沙門（花押）」（T.34 no.1725 p.875c, *l*.19）とあることから、1283年に華厳宗の沙門によって書写されたことが解る。また、「仁和寺蔵本」が『東文選』より先行することはいうまでもない。引用文中、［…］括弧内は筆者による。また、下線は「原本」による筆者の補い。

＊「原本」は、当寺に対して行った「貴重資料所蔵調査及び複写依頼」（2009年4月9日）が受理され、約一ヶ月後（2009年5月15日）に当寺が撮影し出力したものを頂戴した。関係者の話によると、『大正蔵』収録のための閲覧以来、今まで閲覧・複写に応じたことがなく（原則不可）、今回が初めてのことだという。貴重資料の提供にご協力頂いた関係者各位に深く感謝申し上げる次第である。

（13）現在までの調査では、以下の6部（孫引きの場合を含む）において『宗要』の引用が確認される。海東撰述章疏―①表員（CE.-751-）集『華嚴經文義要決問答』（SZ.8 no.237）、日本撰述章疏―①壽靈（CE.-757-791-）述『華嚴五教章指事』（T.72 no.2337）、②増春（CE.-947-956-）釈『華嚴一乘義私記』（T.72 no.2327）、③凝然（CE.1240-1321）述『五教章通路記』（T.72 no.2339）、④審乘（CE.1258-1313-）撰『華嚴五教章問答抄』（T.72 no.2340）、⑤普寂（CE.1707-1781）撰『華嚴五教章衍祕鈔』（T.73 no.2345）

（14）（金達鎭［1966］・李英茂［1974-1975］・〔李箕永［1983］「六門分別」のうち、「第三明能詮用」までの訳〕・李鍾益［1987］）参照。

（15）吉蔵（CE.549-623）撰『法華玄論』巻第一に「玄義有六重。一弘經方法二大意三釋名四立宗五決疑六隨文釋義。」（T.34 no.1720 p.361a, *l*.6）とあり、『宗要』との対応関係は（平井俊栄［1987］pp.101-104）に示されている。また、智顗（CE.538-597）説灌頂（CE.561-632）述『妙法蓮華經玄義』巻第一上に「釋名第一　辨體第二　明宗第三　論用第四　判教第五」（T.33 no.1716 p.681c, *l*. 29 - p.682a, *l*.1）とあり、『宗要』との対応関係は（李永子［1988a］pp.521-523・［1988b］pp.45-47）に示されている。また、両者の説は（福士慈稔［1991］pp.638-639）にも言及されている。

（16）「『玄論』の「弘経方便」と『宗要』の「明詮用」であるが、後者の内容は能詮の用を開と示の二つに分け、「開とは三乗方便の門を開き、示とは一乗真実の相を示す」というのであるから、『玄論』の「弘経方便」とは直接的な関係はない。……しかし、「明詮用」の冒頭に経の「法師品」の一句を引くなど、また後述するように、この段は第二の「経宗」に次いで長大で内容的には『玄論』と類似した文脈が多いことなど関係の深いことがうかがわれる。」（平井俊栄［1987］p.103）参照。

（17）（福士慈稔［1991］p.638）参照。

（18）『法華宗要』（T.34 no.1725 p.874a, *ll*.11-13）

（19）「『宗要』の第六の「消文義」は現行本では欠けているが、「消」は「解釈する」の意で、経文中の難解な意義を消除し解釈することを「消釈」とも称するところから、この一段は『玄論』の第六の「隨文解釈」に相当するものと考えられる。」（平井俊栄［1987］p.103）参照。

(20)『大慧度經宗要』(T.33 no.1697 p.74a, *ll.*3-4)

(21) 0．六門分別　〔注記〕①【T.34 p.870 脚註㊵】「㊟弘安六年相承仁和寺藏本」、【HBZ.1 p.487c 脚註❶】「㊟新修大藏經　第三十四卷（弘安六年相承二[＝仁の誤植]和寺藏本）㊥東文選第八十三卷所載法華經宗要序。」、『東文選』には「法華經宗要序　釋元曉」(DMS.83 p.1*r*, *l.*3) とあり、以下の「將欲解釋此經」から「初述大意者」までの41字を欠く。引用文中、[…] 括弧内は筆者による。

(22) 1－1．初述大意（文辞・義理）　〔注記〕①吉藏造『法華遊意』開題序に「至如妙法蓮華經者。斯乃窮理盡性之格言。究竟無餘之極說。理致淵遠統群典之要。文旨婉麗窮巧妙之談。三聖之所揄揚。四依之所頂戴。」(T.34 no.1722 p.633b, *ll.*15-18) と類似する文例が見られる。　②『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.487c 脚註❷】「「滅」作「咸」㊥。」には「咸」とあるが、「仁和寺蔵本」に「滅」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　③『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.487c 脚註❸】「「花」作「華」㊥。」には「華」とあるが、「仁和寺蔵本」に「花」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。

(23) 1－2．開権・示実　〔注記〕①『法華遊意』開題序に「此經文雖有七軸義有二章。一開方便門二顯眞實義。開方便門者開兩種方便。顯眞實義者顯二種眞實。假三車於門外爲引耽戲之童。設化城於道中以接疲怠之衆。謂乘方便也。皆是吾子等賜大車。既知止息同到寶所。謂乘眞實也。燃燈授記伽耶成道王宮誕生雙林唱滅。謂身方便也。逸多不見其始。窮學莫惻其終。六趣無以攝其生。力負無以化其體。謂身眞實也。」(T.34 no.1722 p.633b, *ll.*21-29) と類似する文例が見られる。　②『大正蔵』の欠字（1/43）。「仁和寺蔵本」は破損して判読できないが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.487c 脚註❹】「□作「四」㊥。」に「四」とあり、「仁和寺蔵本」に残っている字形からも「四」と読めるため、「四」に確定して採用する。　③『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.487c 脚註❺】「「算」作「塵」㊥。」には「塵」とあるが、「仁和寺蔵本」に「算」の異体字「竿」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。なお、〔原文〕・〔訓読文〕では、例外的に正字「算」を用いた。　④『大正蔵』の誤字。『大正蔵』・『韓佛全』には「立」とあるが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.487c 脚註❻】「「立」作「土」㊥。」に「土」とあり、「仁和寺蔵本」にも「土」とあるため、「土」に訂正して採用する。　⑤「仁和寺蔵本」には「四生」とあるが、本箇所は、鳩摩羅什（CE.343-409?）訳（CE.406）『妙法蓮華經』譬喩品の「今此幼童皆是吾子。愛無偏黨。」(T.9 no.262 p.12c, *ll.*26-27)・「衆聖中尊　世間之父　一切衆生　皆是吾子　深著世樂　無有慧心」(p.14c, *ll.*20-21)・「今此三界　皆是我有　其中衆生　悉是吾子　而今此處　多諸患難」(p.14c, *ll.*26-27)・「汝諸人等　皆是吾子　我則是父」(p.15a, *l.*16) などに依拠した表現であり、また、『宗要』の「第二弁經宗」にも「三界所有四生衆生。」(T.34 no.1725 p.871a, *ll.*11-12) とあるため、〔訓読文〕では「衆生」を補った。

(24) 1－3．無二・無別　〔注記〕①『宗要』では、『法華論』の二訳のうち、勒那摩提訳の一巻本が用いられている。以下、本稿における『法華論』の引用は、摩提訳を主とし、必要に応じて留支訳を示すことにする。『法華論』に「彼一大事者。依四種義應知。何㊷者爲四。一者無上義。㊸除一切智智更無餘事。如經欲開佛知見令衆生知得清淨故出現於㊹世。佛知見者如來能證㊺如實知㊻彼義故。二者同義。以聲聞辟支佛佛法身平等故。如經欲示衆生佛知見故出現於世故。法身平等者。佛性法身更無差別故。三者不知義。以一切聲聞辟支佛不知彼眞實處㊼故。不知眞實處者。不知究竟唯一佛乘故。如經欲令衆生悟佛。知見故出現於世。四者爲令證不退轉地示㊽現與無量智業故。如經欲令衆生入佛知見㊾道故出現於世。」【T.26 p.16 脚註㊷】「者＝等㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊸】「除一切＝唯除如來一切義㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊹】「世＋(故)㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊺】「(以)＋如㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊻】「彼＋(深)㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊼】「故＋(言)㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊽】「現＋(欲)㊀㊟」【T.26 p.16 脚註㊾】「[道]－㊀㊟」(T.26 no.1520 p.16b, *l.*20 - p.16c, *l.*3) とあり、一大事の四種の義の肝要を援用している。　②『法華論』に「說三種平等應㊿知。一者乘平等與聲聞授(51)記。唯有大乘無二乘(52)故。二者世間涅槃平等。以多寶如來(53)入涅槃。世間涅槃(54)平等故。三者身平等。多寶如來已入涅槃。復示現身自身他身法身平等無差別故。」【T.26 p.18 脚註⑮】「知＋(何者名三種平等云何對治)㊀㊟」【T.26 p.18 脚註⑯】「(菩提)＋記㊀㊟」【T.26 p.18 脚註⑰】「故＋(是乘平等無差別也)㊀㊟」【T.26 p.18 脚註⑱】「入＋(於)㊀㊟」【T.26 p.18 脚註⑲】「平等＝彼此平等無差別㊀

㊀」（T.26 no.1520 p.18a, *ll.*12-17）とあり、順序は異なっているが、本箇所からの援用であることは明らかである。

(25) 1－4．妙法・蓮華（1）　〔注記〕①『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❶】「「滅」作「咸」㊀。」には「咸」とあるが、「仁和寺蔵本」に「滅」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　②『妙法蓮華經玄義』序王に「華敷譬開權。蓮現譬顯實。」（T.33 no.1716 p.681b, *ll.*2-3）と類似する表現が見られる。　③『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❷】「「華」作「花」㊀。」には「花」とあるが、「仁和寺蔵本」に「華」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。

(26) 1－5．妙法・蓮華（2）　〔注記〕①『大正蔵』の誤字。『大正蔵』・『韓佛全』には、「久」とあるが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❸】「「久」作「人」㊀。」に「人」とあり、「仁和寺蔵本」にも「人」とあるため、「人」に訂正して採用する。　②『大正蔵』の欠字（2・3/43）。「仁和寺蔵本」は破損して判読できないが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❹】「「□□總」作「處怳惚」㊀。」に「處怳」とあるため、「處怳」に確定して採用する。また、〔『大正蔵』の誤字。〕『大正蔵』・『韓佛全』には「總」とあるが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❹】に「惚」とあり、「仁和寺蔵本」にも「惚」とあるため、「惚」に訂正して採用する。　③『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❺】「「是」上有「於」㊀。」には「於」とあるが、「仁和寺蔵本」には見当たらないため、「仁和寺蔵本」に従う。　④『大正蔵』の欠字（4/43）。「仁和寺蔵本」は破損して判読できないが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❻】「□作「以」㊀。」に「以」とあるため、「以」に確定して採用する。　⑤『大正蔵』の欠字（5/43）。「仁和寺蔵本」は破損して判読できないが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❼】「□作「羊」㊀。」に「羊」とあるため、「羊」に確定して採用する。　⑥『法華遊意』開題序に「良以小志前開故早❹馳羊鹿。大心後❺發方駕此白牛。」【T.34 p.633 脚註❹】「馳＋(彼) ㊀」【T.34 p.633 脚註❺】「發＋(故)㊀」（T.34 no.1722 p.633b, *ll.*19-20）とあり、本箇所からの引用であることが指摘（徐輔鉄［1985b］pp.355-356）されているが、『妙法蓮華經玄義』巻第二上に「今法華明。昔於波羅奈轉四諦法輪五衆之生滅。今復轉最妙無上之法輪。此亦待鹿苑爲麁法華爲妙。妙義皆同待麁亦等。文義在此也。」（T.33 no.1716 p.696b, *ll.*22-26）とあるように、ここは『遊意』よりもむしろ『玄義』に依拠した表現と考えられる。なお、本箇所は（呉光爀［1978］p.860, 注3）に「智顗の説を引用」として指摘されている。ただし、注3に「大正蔵三五・八七〇頁。」とあるのは「大正蔵三四」の誤りであろう。　⑦『大正蔵』の欠字（6/43）。「仁和寺蔵本」は破損して判読できないが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❽】「□作「待」㊀。」に「待」とあるため、「待」に確定して採用する。　⑧『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❾】「「麁」作「危」㊀。」は、『東文選』には見当たらず、『韓佛全』の誤記か版本が異なるのか不明である。　⑨『妙法蓮華經』譬喩品に「駕以白牛。」（T.9 no.262 p.12c, *l.*22）とある。　⑩【至人】釈迦如来の尊号。　⑪「之れ」とは、前文の「茲の處」とは、反対なる意味であるが、主語が明記されていないために、文章に矛盾を来たしている。従って、〔訓読文〕では「之れ［＝火宅］」を補った。

(27) 1－6．妙法・蓮華（3）　〔注記〕①『法華遊意』開題序に「夫借一以破三。三除而一捨。假修以斥短。短息而脩忘。」（T.34 no.1722 p.633c, *ll.*2-3）とあり、本箇所からの引用であることが指摘されている。（徐輔鉄［1985b］pp.355-356）・（福士慈稔［1991］pp.639-640）参照。　②『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❿】「「迺□」作「乃借」㊀。」には「乃」とあるが、「仁和寺蔵本」に「迺」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　③『大正蔵』の欠字（7/43）。『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註❿】に「借」とあり、「仁和寺蔵本」にも「借」とあるため、「借」に確定して採用する。　④『大正蔵』の脱字。『大正蔵』・『韓佛全』には欠けているが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓫】「「除」下有「而」㊀。」に「而」とあり、「仁和寺蔵本」にも「除而」とあるため、「而」を補填して採用する。　⑤『大正蔵』の欠字（8/43）。『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓬】「□作「修」㊀。」に「修」とあり、「仁和寺蔵本」にも「修」とあるため、「修」に確定して採用する。　⑥『大正蔵』の欠字（9/43）。『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓭】「□作「斥」㊀。」に「斥」とあり、「仁和寺蔵本」にも「斥」とあるため、「斥」に確定して採用する。　⑦『大正蔵』の欠字（10/43）。『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓮】「□作「修」㊀。」に「修」とあり、「仁和寺蔵本」にも「修」とあるた

め、「修」に確定して採用する。　⑧『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓯】「「忘」作「亡」㊥。」には「亡」とあるが、「仁和寺蔵本」に「忘」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　⑨『妙法蓮華經』方便品に「是法不可示　言辭相寂滅」（T.9 no.262 p.5c, *l*.25）とある。　⑩『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓰】「「蕩」作「儻」㊥。」には「儻」とあるが、「仁和寺蔵本」に「蕩」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　⑪『大正蔵』の誤字。『大正蔵』・『韓佛全』には「肅」とあるが、『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓱】「「肅」作「簫」㊥。」に「簫」とあり、「仁和寺蔵本」にも「蕭」とあるため、「蕭」に訂正して採用する。また、「元曉は‘蕭’を多く用いているため‘肅’は誤植或いは略字と見做すべし。」（李箕永［1983］p.60 註27））という指摘もあるが、「ここで文中に「蕩然靡據。蕭焉離寄」という言葉は、僧肇の「百論序」［僧肇（CE.384-414?）作「百論序」に「儻然靡據。而事不失眞。蕭焉無寄。而理自玄會。」（T.30 no.1569 p.167c, *l*.29 - p.168a, *l*.1）とある。］からの引用であるが、これは『遊意』［（T.34 no.1722 p.637c, *l*.29）］と『玄論』［（T.34 no.1720 p.381c, *l*.17）］の両者において、いずれも「経宗」を説く段に、前述の引用文と相前後する箇所で説かれている。」（平井俊栄［1987］p.107）と指摘されているように、本箇所は「百論序」からの引用（孫引きの場合を含む）である。引用文中、［…］括弧内は筆者による。なお、元曉撰『大乘起信論別記』本にも「故如是甚深因緣道理。蕭焉靡據。蕩然無礙。豈容違諍於其問哉。」（T.44 no.1845 p.236b, *ll*.22-23）と同文例が見られる。　⑫老子著『道德經』老子第二十五章に「吾不知其名。强字之曰道。强爲之名曰大。」とあり、これに依拠した表現と考えられる。　⑬『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓲】「「稱」［作］「號」㊥。」には「號」とあるが、「仁和寺蔵本」に「稱」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。引用文中、［…］括弧内は筆者による。　⑭『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓳】「「花」作「華」次同㊥。」には「華」とあるが、「仁和寺蔵本」に「花」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　⑮『妙法蓮華經』隨喜功德品に「若復有人於講法處坐。更有人來。勸令坐聽。若分座令坐。是人功德。轉身得帝釋坐處。若梵王坐處。若轉輪聖王所坐之處。」（T.9 no.262 p.47a, *ll*.5-6）とある。　⑯『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註⓴】「「當」作「尙」㊥。」には「尙」とあるが、「仁和寺蔵本」に「當」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　⑰『東文選』・『韓佛全』の【HBZ.1 p.488c 脚註㉑】「「逕」作「經」㊥。」には「經」とあるが、「仁和寺蔵本」に「逕」とあるため、「仁和寺蔵本」に従う。　⑱「そもそも一を借りて三を破れば、三が除かれて一も捨てられる。長を借りて短を打破すれば、短が無くなって長も無くなる。」（菅野博史［1992］p.34）参照。とくに、本箇所は、吉藏が道生（CE.355?-434）撰『妙法蓮華經疏』（SZ.27 no.577 p.5a, *ll*.12-13, p.14b, *ll*.13-21）より受けついだものとされている。（丸山孝雄［1978］p.15, p.409 註⑯⑰）参照。

略語・参考文献・キーワード

（CE）	「Common era（共通年代）」
『東文選』（DMS）	『東文選』
『大正蔵』（T）	『大正新脩大藏經』
『韓佛全』（HBZ）	『韓國佛教全書』
（SZ）	『新纂大日本續蔵経』
『佛解』	『佛書解説大辭典』
『韓仏解』	『韓国仏書解題辞典』

〔①『法華宗要』以下、発行年順。文献名の冒頭に付した*は、筆者による和訳を示す。〕
福士慈稔稿［2009］「新羅・高麗仏教研究に於ける日本仏教研究の重要性と問題点」（『大崎学報』164、pp.1-18）
Muller, A. Charles 稿［2009］「Wonhyo on the *Lotus Sūtra*」（『インド哲学仏教学研究』16、pp.25-38）
桑谷祐顕稿［2007］「統一新羅、高麗の天台僧」（『天台学報』特別号、pp.63-80）
福士慈稔著［2004］『新羅元曉研究』（大東出版社、東京）

橋川智昭稿［2003］「元暁と基 真如観と衆生論」（『印度學佛教學研究』51-2、pp.547-551）
金　勲稿［2001］「元暁と隋唐仏教の諸教判について」（『大阪経済法科大学論集』81、pp.123-139）；金勲著［2002］『元暁佛学思想研究 大阪経済法科大学アジア研究所 研究叢書 10』（大阪経済法科大学出版部、八尾、pp.53-75）
金　英吉稿［1998］「*元曉の『法華經宗要』より見たる一乘統一」（『元曉學研究』3、pp.57-70）
徐　榮愛稿［1995］「元暁の『法華宗要』の研究」（『大谷大学大学院研究紀要』12、pp.51-73）
安　重喆稿［1993］「*海東天台の源流」（『中央增伽大學論文集』2、pp.97-120）
菅野博史著［1992］『法華とは何か『法華遊意』を読む』（春秋社、東京）
福士慈稔稿［1991］「元暁の法華経観に於ける諸問題」{塩入良道先生追悼論文集刊行会編集［1991］『天台思想と東アジア文化の研究 塩入良道先生追悼論文集』（山喜房仏書林、東京、pp.637-647）}
福士慈稔稿［1990b］「元暁著述に於ける天台の影響について」（『印度學佛教學研究』39-1、pp.122-124）
福士慈稔稿［1990a］「『元暁の法華経観』元暁注疏に於ける天台の影響の有無」（『棲神』62、pp.186-187）
福士慈稔稿［1988］「朝鮮半島に於ける法華経伝播について」（『大崎学報』145、pp.199-210）
峰岸　明編［1988］「新編諸宗教藏總錄卷一・二・三 二卷 高山寺藏」{高山寺典籍文書綜合調査団編［1988］『高山寺古典籍纂集』（東京大学出版会、東京、pp.241-342）}
李　永子稿［1988b］「*元曉の天台會通思想研究」{李永子著［1988］『韓國天台思想の展開』（民族社、ソウル、pp.42-72）}；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第63冊 元曉の華嚴・法華思想，唯識・涅槃思想及び教判論』（弗咸文化社、高陽、pp.171-201）
李　永子稿［1988a］「*元曉の法華經理解」（『第5回 國際學術會議 論文集／韓國精神文化研究院』2、pp.518-540）；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第63冊 元曉の華嚴・法華思想，唯識・涅槃思想及び教判論』（弗咸文化社、高陽、pp.129-151）
平井俊栄著［1987］『法華玄論の註釈的研究』（春秋社、東京、pp.101-108）
李　鍾益訳［1987］『*法華經宗要』{元曉全書國譯刊行會編，趙明基監修［1987］『國譯 元曉聖師全書』卷一（寶蓮閣、ソウル、pp.33-113）}
徐　輔鉄稿［1985b］「法華宗要における元暁の和諍思想」（『駒澤大学佛教学部論集』16、pp.351-366）
徐　補鐵稿［1985a］「法華宗要の研究」（『印度學佛教學研究』33-2、pp.517-518）
鹽入良道稿［1984］「新羅元暁大師撰『宗要』の特質」（『天台学報』26、pp.17-23）
李　箕永稿［1984］「*元曉の法華思想 金剛三昧經論との關係」（『新羅文化／東國大學校 新羅文化研究所』1、pp.87-94）；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第63冊 元曉の華嚴・法華思想，唯識・涅槃思想及び教判論』（弗咸文化社、高陽、pp.65-72）
石井公成稿［1983］「元暁と中国思想」（『印度學佛教學研究』31-2、pp.164-167）
金　煐泰稿［1983］「*三國時代の法華受容とその信仰」{佛教文化研究所編［1983］『韓國天台思想研究』（東國大學校出版部、ソウル、pp.11-40）}；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第75冊 新羅佛教篇 阿彌陀・觀音信仰及びその他 2』（弗咸文化社、高陽、pp.79-108）
任　禹植稿［1983］「法華宗要における一乘説について」（『印度學佛教學研究』31-2、pp.647-648）
李　箕永稿［1983］「*法華宗要に現れた元暁の法華經觀」{佛教文化研究所編［1983］『韓國天台思想研究』（東國大學校出版部、ソウル、pp.41-100）}；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第52冊 元曉 著述書Ⅰ』（弗咸文化社、高陽、pp.487-546）
東国大学校仏教文化研究所編［1982］『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、東京）；東國大學校佛教文化研究所編纂［1976］『韓國佛教選述文獻總錄』（東國大學校出版部、ソウル）
金　昌奭稿［1980］「元暁の教判資料に現われた吉蔵との関係について」（『印度學佛教學研究』28-2、pp.826-828）
金　昌奭稿［1979b］「元暁の教判観」（『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』13、pp.14-23）
金　昌奭稿［1979a］「元暁の法華宗要について」（『印度學佛教學研究』27-2、pp.628-629）
東國大學校佛典刊行委員會編［1979］『韓國佛教全書』第1冊（東國大學校出版部、ソウル、pp.487c-494c）
呉　光爀稿［1978］「高麗天台宗開立の背景について」（『印度學佛教學研究』26-2、pp.860-863）

金　昌奭稿［1978］「韓国古代天台について（高麗天台宗成立以前を中心として）」（『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』12、pp.16-27）
丸山孝雄著［1978］『法華教学研究序説 吉蔵における受容と展開』（平楽寺書店、京都）
趙　明基編［1978］『元曉大師全集』（寶蓮閣、ソウル、pp.3-18）
金　煐泰稿［1977］「*法華信仰の傳來とその展開 三國・新羅時代」{韓國佛教學會編［1977］『米山洪庭植博士華甲紀念佛教學論叢 韓國佛教學 第三輯』（韓國佛教學會、ソウル、pp.15-47)}；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第74冊 新羅佛教篇 阿彌陀・觀音信仰及びその他１』（弗咸文化社、高陽、pp.283-315）
富沢慶栄稿［1975］「嘉祥吉蔵の教判 二蔵三転法輪について」（『印度學佛教學研究』23-2、pp.663-664）
李　英茂訳［1974-1975］「*元曉の法華經宗要」（『梵聲／大韓佛教佛入宗』13（74.4）、pp.20-27・14（74.5）、pp.15-20・15（74.6）、pp.22-26・16（74.7）、pp.21-27・17（74.8）、pp.18-21・18（74.9）、pp.20-23・19（74.10）、pp.27-30・20（74.11）、pp.23-26・21（74.12）、pp.29-32・22（75.1）、pp.19-22・23（75.2・３）、pp.28-30）
徐居正等受命編［1970］『東文選 130巻 目録３巻』第三（学習院東洋文化研究所、東京）
金　達鎭訳［1966］『*法華經宗要』{大韓佛教曹溪宗譯經委員會編［1966］『ハングル 大藏經』第156冊（東國大學校附設東國譯經院、ソウル)}；東國大學校附設東國譯經院編［1995］『ハングル大藏經』第70冊（東國譯經院、ソウル、pp.472-493）
塩田義遜著［1960］『法華教学史の研究』（地方書院、東京、pp.330-347）
東國大學佛教史學研究室編［1949］『元曉大師全集』第１冊（東國大學佛教史學研究室、ソウル）
江田俊雄稿［1936］「朝鮮版法華經疏に就いて 朝鮮に於ける佛書開版の一事例」（『宗教研究』新13-2、pp.50-59）；江田俊雄著［1977］『朝鮮仏教史の研究』（国書刊行会、東京、pp.359-371）
鈴木覺心稿［1934］「朝鮮天台に就いて」（『山家学報』新９、pp.73-98）

〔⑨『法華経論述記』〕
朴　姚娟稿［2008b］「*新羅義寂の『法華經』理解『法華經論述記』の分析を中心として」（『佛教學研究』21、pp.177-218）
朴　姚娟稿［2008a］「*『法華經論述記』の構造と話者」（『梨花史學研究』37、pp.183-208）
三友健容稿［2005］「義寂撰『法華論述記』の一考察」{村中祐生先生古稀記念論文集刊行会編集［2005］『大乗佛教思想の研究 村中祐生先生古稀記念論文集』（山喜房佛書林、東京、pp.117-156)}
李　　萬稿［2004］「*新羅義寂の一乗思想と修行論」（『佛教學報／東國大學校佛教文化研究院』41、pp.7-24）
李　起雲稿［1996］「*新羅義寂の法華思想研究」（『大學院研究論集／東國大學校大學院』26、pp.31-55）

〔⑩『法華経集験記』〕
崔　桐洵稿［2009］「新羅義寂の著述を通してみる古代韓日佛教交流とその意義」（『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』９、pp.1-16）
髙平妙心稿［2008］「『法華経集験記』に関する一考察」（『印度學佛教學研究』56-2、pp.668-671）
髙平妙心稿［2007］「『法華経集験記』の研究（一）東大本『集験記』翻刻の試み」（『法華文化研究』33、pp.77-94）
朴　姚娟稿［2007］「*義寂の『法華經集驗記』編纂の背景と特徴」（『歴史と現実／韓國歴史研究會』66、pp.273-301）
金　敬姫稿［2003］「*義寂の『法華經集驗記』に對する考察」（『日本文化學報／韓國日本文化学會』19、pp.221-233）
三友健容稿［2003］「寂撰『法華経集験記』の一考察」{渡邊寶陽先生古稀記念論文集刊行会編［2003］『法華仏教文化史論叢 渡辺宝陽先生古稀記念論文集』（平楽寺書店、京都、pp.89-107)}
末木文美士稿［2001］「東京大学所蔵の仏教貴重書」（『印度學佛教學研究』50-1、pp.1-8）
李　恵燕稿［2001］「鎮源が観た「法華経集験記」について」（『懐風藻研究』７、pp.39-61）
金　相鉉稿［2000］「*義寂の『法華經集驗記』について」（『東國史學』34、pp.19-32）

李　起雲稿［1997］「*新羅義寂の『法華經集驗記』研究」{彌天睦楨培博士恩法學人會編［1997］『彌天睦楨培博士華甲紀念論叢 未來佛教の向方』（藏經閣、陜川、pp.559-579)}；弗咸文化社編［2003］『韓國佛教學研究叢書 第39冊 新羅 佛教（Ⅱ)』（弗咸文化社、高陽、pp.239-260）
太田晶二郎稿［1981］「東京大學圖書館藏 法華經集驗記 解題」{貴重古典籍刊行會［1981］『東京大學圖書館藏 法華經集驗記』（貴重古典籍刊行會、東京、pp.1-8)}；太田晶二郎著［1992］「東京大學圖書館藏 法華經集驗記 解題」{太田晶二郎著［1992］『太田晶二郎著作集』第4冊（吉川弘文館、東京、pp.21-44)}
太田晶二郎稿［1980］「寂法師の法華経の験記は現存する」(『日本歴史』390、pp.85-89)；太田晶二郎著［1991］「寂法師の法華經の驗記は現存する」{太田晶二郎著［1991］『太田晶二郎著作集』第1冊（吉川弘文館、東京、pp.327-334)}

元暁、法華宗要、義天、海東天台宗、朝鮮仏教

〔付記〕
「原本」の翻刻及び掲載許可に快く応じて下さった（2010年11月16日）仁和寺の関係者各位、また、申請にあたってご尽力頂いた立正大学情報メディアセンター（大崎図書館）の関係者各位に深く感謝申し上げる次第である。なお、訓読訳の作成にあたっては、立正大学大学院文学研究科仏教学専攻平成22年度開設科目東洋哲学特講において講読し、担当教員である藤井教公教授（北海道大学大学院文学研究科思想文化学専攻）にご指導を頂いた。記して深く感謝申し上げる次第である。